

富永神社祭礼奉納

能

組

とき 平成元年十月六日(金)
午後四時始
ところ 富永神社 能楽殿

七騎落

荒井裕子

仕舞

羽衣

伊藤万里子

猩猩

荒井万友美

狂言 口真似

水野美麻子

原千香子
松井早苗

居離子 竹生島

大鼓清水利高
小鼓森田收

大鼓中嶋康夫
苗太田康弘

仕舞

放下僧

花井洋之

東北

花井延昌

狂言 樋ノ酒

天野泰広
加藤将二

山口恒生

独調 蟬丸

長田 驍

今岡 アイ子

居離子 船弁慶

大鼓鈴木正治
小鼓森田收

大鼓水谷清
苗今泉英三

仕舞

葛城

大岩邦江

半部

榊原香奈子

唐船

川村実由起

狂言 長刀忘答

安形忠久

小林常男
酒井宏
権田重
原田三男
山本憲吉
水谷至男
西田好夫

能

井筒

シテ 太田 康弘

間

ワキ

鈴木 肇
加藤 賢一

大鼓 清水 利高
小鼓 永田 六兵衛

苗 今泉 英三

仕舞 杜若 今泉 利夫

狂言 六地藏

佐野 元之助
松井 平

中山 伸一
水谷 至男
西田 好夫

仕舞 実盛 鈴木 肇

能

殺生石

シテ 今泉 英三

間

ワキ

今泉 利夫
畑中 良雄

大鼓 鈴木 木正
小鼓 福井 啓次郎

大鼓 鈴木 崇史
苗 鹿取 希世

附祝言

(終了予定 九時半頃)

主催 新城能楽社中
本町区

あらすじ

狂言 口真似くちまね

知人から酒、肴を貰った主、程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは、評判の酒乱の男。一計を案じた主人は太郎冠者に、自分の言うように真似をせよと言いつけられます……

狂言 樋ノ酒ひのさけ

留守の度に盗み酒をする冠者二人、今日は二人を米蔵、酒蔵に分けて留守を申付け主人は外出します。やがて二人は両方の蔵の窓に樋をかけ渡し、酒をそそぎ飲む……

狂言 長刀応答ながなたあしらい

長刀応答とは客あしらいをザツと簡略にすますことです。主人の留守中の来客を長刀応答にしておけと言いつけられた太郎冠者は、本物の長刀を持ち出して、客を追払います。そこで近所の衆が大挙しておしかけ、太郎冠者との間で立ち廻りとなります……

能 井筒

旅僧が在原寺のそばを通りかゝり、この寺がその昔在原業年と紀有常の娘の夫婦が住んでいた石上の旧蹟であることを思い出し苔むした古塚の前にたゞずんで居りますと折から若い女が塚に花木を手向けに来たのを見て声をかけると当寺の開基業平のこと、その妻の紀有常の女のことを語ります。

古塚のそばにある板井のまわりで遊んだ幼い男女が成長し、男は「筒井筒」の歌を、女は「くらべこし」の歌を贈り合い夫婦になります。伊勢物語りによれば夫が夜毎に恋人のところへ忍んでゆくのを妻は恨むどころか通い路の無事を祈って竜田山の歌を詠んだので、夫はその心根をいじらしく思い、再び仲睦じくなつたとあります。それで紀有常の娘を筒井筒の女のとも、人待つ女とも言ふのだと詳しく物語るのて僧はおおよそのことを察しますが果して女は有常の娘の亡霊であることを明かし井筒のかけに消えます。

やがて秋の夜も更けた頃、女が僧の夢枕に立ち業平の面影恋しさの余り昔男（業平）の姿を真似て衣冠束帯をつけて昔をなつかしむように舞を舞いますが、その女の幽霊は幻となつて消え失せ夜明けとともに目ざめた僧の眼の前にはただ破れ芭蕉の葉が風に鳴っているばかりでした。まことに秋にふさわしい静かな名曲でございます。

狂言 六地藏ろくじそごう

ある田舎者が新築の堂に安置する六体の地藏を求めに都へ上がって来る。大声で尋ね廻る田舎者に都の詐欺師が関わりをつけ自ら真仏師と名乗り明日の今頃までに作ってやろうと約束する。そして……

能 殺生石

玄翁という道人が旅に出て白河の関を越え、那須野の原に着いたのは秋も早や夕へ近い頃であった。そこへ里女があらわれ傍の石をさして近づくなど注意します。そのわけを聞くとこの石は殺生石とよばれ、これに触ると命をとられると言います。女の話があまりにも詳しいので不審に思つてその身許をきくと、女は自分こそ昔の玉藻前、今は殺生石の石魂であることを明かし昼は浅ましくして本体を現わせないが夜になったら姿を見せるから待ちたまえと言ひ残して石の影に身をかくします。

やがて夜が深まると殺生石が二つに割れ光を放つて現われたのは狐の姿をした石魂で玉藻前の物語を繰返した後に野千と変じ追立てられて射殺された有様をみせた後いまは戒をうけて成佛し悪事はしないと堅く誓つてもとの石の沈黙に帰ります。

能装束・能面展示会

とき 十月七日(土)午前十一時より三時まで
ところ 新城文化会館和室